

面でも早期の文明社会の建築段階に近づいていたといえる。

ここで私たちは、東山嘴と牛河梁積石塚墓葬群がいかに多くの石を用いたか、また多くの巨大な石を費やしたかについて述べるのではなく、牛河梁轉山子のピラミッド式巨大遺構で必要とされた人員のデータを基にして、当時の紅山文化の生産レベルと管理体制を分析し、それによって当時の社会形態と文化進歩の程度を論じたいのである。

ある学者の研究によれば、このピラミッド式巨大建築の地上部分の中心は、地固めした丘からなり高さは約25m、直径は40m近くあり、外側は巨大な石で包まれているとされている。建築の全体範囲は1万㎡近くあり、地固めした土の部分だけでも10万㎡以上ある。その中でも、遠くから運ばれてきた巨大な石の工事には、少なくとも数10万人の労働者が必要とされている。個別の氏族や集落の単位を越えた上位の社会組織や何らかの文化共同体がなかったとすれば、こうした巨大工事は組織的に計画できなかったし、ましてや完成などしなかったであろう。もし、ある組織や文化共同体が機能していたとすれば、(こうした組織、協調された指揮機能を持つ文化共同体があったとすれば)事実上、国家的な職能が作用していたと言えるのである。



写真13. 玉人(牛河梁第16地点4号墓出土。  
高さ18.6cm)

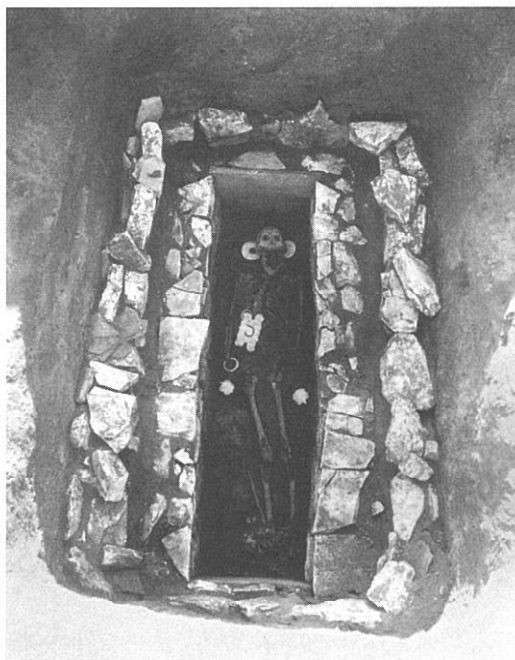


写真14. 牛河梁第2地点1号塚21号墓の石棺墓。

このような面から説明すれば、文明の曙はすでにこの地に現れていたのである。1970年代末と80年代初頭の喀左東山嘴祭壇と牛河梁女神廟、積石塚の発見、1990年代の赤峰

敖漢四家子草帽山でさらに発見された祭祀機能を基礎とする紅山文化の積石塚は、疑いもなく紅山文化の内容に新しい血と活力を注入し、考古学や歴史学界での文明起源に関する話題を活発化させ内容を豊かにした。そこから、中国北方の長城地帯と中華文明の曙の関係は緊密に論じられるところとなった。さらに、ここは中原の黄河文明と同列で語られる遼河文明の発祥地とされ、これによって紅山文化の研究はさらに高い出発点へと進み、紅山文化の「文明」熱は一気に高まったのである。

## 5. 「文明時代の曙」を示す紅山文化

次に、紅山文化の壇、廟、塚の発掘者として議論を甦したい。私は、上層建築の範疇にある等級関係を示す宗教祭祀や文化芸術は、必ずや社会の生産能力と呼応していると考えている。もし、長期間の相対的な安定と繁栄した社会環境がなければ、壇、廟、塚などこうした偉大かつ巨大な遺構の構築は不可能であったと考える。すでに発掘された積石塚の中心にある大きな塚墓は、規則的に石が築かれ、一人用の墓の埋葬品としてはとりわけ美しい物が多い。これに反し、二次埋葬墓は粗末で、埋葬品も少ないか、あるいは無く、墓の主人間に身分等級の明確な区別がある。

このことから、牛河梁の廟や塚は紅山文化の社会構成をあるがまま写したにとどまらず、当時の社会の縮刷だったといえるほか、この時期の先住民族は階級社会へ歩み出していたと考えられる<sup>(10)</sup>。

多くの学者は、中国には5000年の文明史があり、四大文明の古い歴史を持つ国の1つであると考えてきた。それにも関わらず長い間、5000年の文明史にふさわしい起源を実証するものを見つけられずにいた。とりわけ、エジプトのピラミッドやメソポタミア文明のウル神廟、インド河流域のモヘンジョダロ遺跡のような、文明を“象徴”するものが欠けていた。

近年の中国各地での先史考古学の重大な発見は、5000年前から4000年前の文明起源の遺跡に関わるもので、“象徴”を含む実証や若干の希望的な手がかりを提供した。牛河梁の壇、廟、塚の遺跡群の年代は今から約5000年前で、中国文明と文化伝統の起源において突出した地位を占める。よって、その中でもここは最も代表的な場所なのである<sup>(11)</sup>。

『発掘簡報』の中で、牛河梁の壇、廟、塚と中華文明の起源との関係について直接的な分析と判断が行われたが、著名な考古学者、蘇秉琦教授も東山嘴と牛河梁での考古成果を高く評価し、これら考古遺跡の発見が「わが国が早くも5000年前にすでにコミュン（公社）を根付かせ、また、コミュンをしのぐ一段高い社会階級形式があったことを説明している」と述べている。

わが国の他の地方では、まだこれに相応する時期の類似した遺跡群は発見されていないが、これらの発見は中華文明の起源を1000年も繰り上げた。また、ある学者は紅山文化

の原始的信仰を分析した上で、東山嘴祭壇の前円後方・左右対称の作りが以後の中国の壇、廟、塚の有機的統一体の大型建築群の嚆矢となったとした。ここに原始宗教が繁栄、発達した現象が見られる一方、当時の社会組織が激烈に変化していたこともうかがわせている。血縁関係によって結ばれた当時の氏族社会が解体し、社会勢力が次第に神権と政権を握る1人の特権者の手中に集中し、1つの中央集権機構——国家が現れ、あるいは現れようとする、それは正に「文明」の到来であった<sup>(12)</sup>。また、ある学者は、壇、廟、塚の礼制建築が持つ社会的機能が、神によって福を招く巫術活動の重要な場所であり、神権統治の中心的場所であると同時に、政治、経済、文化の中心であるとして、紅山文化の社会はすでに文明時代に突入していた可能性が高いとした<sup>(13)</sup>。さらに、別の学者は古い文献資料を結び合わせて、遼西紅山文化の社会はまさに重大な変革時期にあり、階級社会へと足を踏み出していたとした。その歴史時期は、顛頊（神話上の王の名）の頃と符合するとした<sup>(14)</sup>。

伝統的な理論では、文明の出現は3つの要素を同時に持たなければならないとしている。即ち、文字、都市、青銅器である。この説明にしたがえば、後期の紅山文化社会はまだ文明段階に入っていない。これは理解できる。しかし、紅山文化の成熟した玉器の組み合わせや玉器文化群には原始時代の玉礼制の糸口が現れ始め、紅山文化の壇、廟、塚は強大な社会機能と厳密に順序立てられた管理秩序とレベルを反映しており、紅山文化がすでに文明時代へ近づきつつあることを我々に信じさせるものがある。実際、神権と族権が互いに結合した紅山文化後期の社会が示すのは、文明時代の一般的な特徴であり、人々に文明の曙を告げるものであった。紅山文化が展開した大地の文明の光は、まさにその独特の方式によって太古の西遼河流域に現れたのである。

(翻訳：藤田園子)

## 註

- (1) 蘇秉琦『華人・龍的傳人・中国人—考古尋根記』遼寧大学出版社、1994年、88頁。
- (2) 徐光冀「紅山文化的新発見」『新中国の考古発見和研究』文物出版社、1984年、175頁。
- (3) 孫守道、郭大順「論遼河流域の原始文明与龍的起源」『文物』1984年第8期。
- (4) 呂軍「紅山文化的玉器研究」『青果集』知識出版社、1998年、44頁。
- (5) 蘇秉琦『中国文明の起源』三聯書店、1999年、34～35頁。
- (6) 遼寧省文物考古研究所『牛河梁紅山文化遺址与玉器精粹』文物出版社、1997年、15頁。
- (7) 蘇秉琦「淺談東山嘴」『考古』1984年第6期。
- (8) 王大有『上古中華文明』中国社会出版社、2001年、214～215頁。
- (9) 註8に同じ。
- (10) 遼寧省文物考古研究所「遼寧牛河梁紅山文化“女神廟”与積石墓群発掘簡報」『文物』1986年第8期。
- (11) 遼寧省文物考古研究所『牛河梁紅山文化遺址与玉器精粹』文物出版社、1997年、39頁。
- (12) 蘇秉琦『華人・龍的傳人・中国人—考古尋根記』遼寧大学出版社、2000年、81頁。

(13) 吳汝祚「論老哈河、大梁河地区的文明起源」『北方文物』、1995年第1期。

(14) 張博泉「論遼西發見五千年前文明曙光的歷史蠡測」『遼海文物學刊』1987年第2期。

【写真・挿図出典】

写真1=2005年9月筆者撮影（巴林橋附近にて）

写真3=郭大順『紅山文化』文物出版社、2005年

写真2・4・7・8・10、図1=遼寧省文物考古研究所『牛河梁紅山文化遺址与玉器精粹』文物出版社、1997年

写真5・6・9・11・12・13・14=遼寧省文物考古研究所『牛河梁遺址』学苑出版社、2004年